＊遊空間＊

遊ぶ学ぶ白神

永井雄人

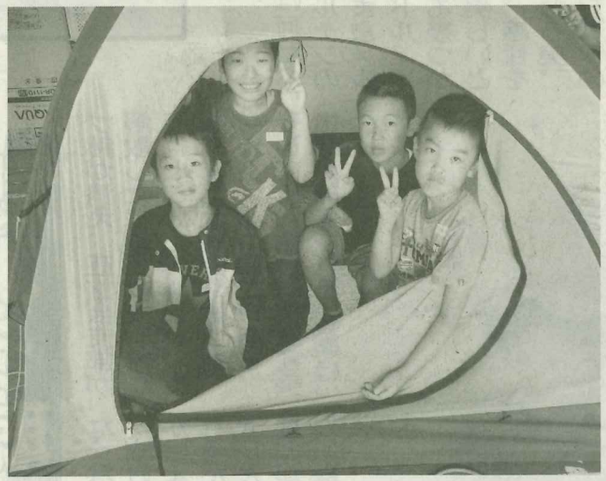
～～5～～

癒やしの森と出会い

赤石マタギ小屋で遊ぼう

鰺ケ沢町赤石地区（当時の赤石村）は、「赤石マタギ」といわれるマタギをなりわいとする人が多かった。特に一ツ森と大然（しかり）集落は、「マタギの里」として一流のマタギが集中し、この赤石マタギを代表する人物に、大谷石丞じいさんがいた。大然集落は昭和20年3月、大雪と大雨で赤石川が氾濫して消滅したが、その当時の様子が「遭難者追悼碑」として今も残されている。

赤石川渓流奥地には今も青沼とその周辺を営林署から有料で借り受け、沼にコイの稚魚を放流し、沼のほとりに小屋を建ててマタギの本拠地にすると共に、キノコを栽培したりコイの世話をしている。このマタギ小屋は今現在も白神自然学校が津軽森林管理署と契約して使用している。



テント泊を楽しむ都会の子どもたち

青沼

夏休みに子どもたちが来ると必ず胴長を履いて赤石川を渡り、対岸の急な山道を登りマタギ小屋を目指す。小屋にはゴムボートが用意されており、空気を入れて青沼に浮かべては、のんびりこぎながら周りのブナ林を眺めていると、白神山地の癒やしの森の新しい出会いがある。

大谷さんの息子・石捷さんのガイドで、この場所での熊の狩猟体験の話を聞いたり、赤石マタギの頭領の山でのおきてや魚釣りの話、山菜やキノコ狩りの話を聞いていると、白神山地は里山の人々と共生してきた森という事がよく伝わってくる。

「又鬼説」はさまざまで、マタギは一度獲物を殺しても、また心を鬼にして次の獲物を追い求めるという意味で伝えられている。もう一つは普段は人として生きているが、獲物を殺すときだけ心を鬼にして命をいただく、つまり人が鬼となるというところからきている説、それから北海道のマタタギ（アイヌ語）の略ではないかとも言われ、アイヌ語の語源としてのほかの例は、マタウンパ（雪山で狩をする者の意味）からきたという説もある。

菅江真澄はマダハギから来たという。マダは科の木のことで、この木の皮をはぎ、繊維で織った着物を着ていたからだと言う。柳田国男は、信州の山の人たちが休憩時に使う息杖のマタツボから起こったと説明している。職業としてのマタギがなくなってしまった今、マタギの儀式や儀礼を引き継いでいくことも後継者を見つけることも不可能である。それは時代の流れゆえ仕方のないことかもしれない。

しかし、かつてそうして命を賭けて狩猟に生き、生計を立てていた人たちがいたという歴史を忘れる気にはならない。そういう過去があったということを、せめてこの青沼に出かけて伝え残していくべきと思い、今年も夏休みに訪れる子どもたちを案内して語っていきたいと思う。

最後に、今年10日間白神自然学校でワーケーションをした女子学生が、この青沼を訪れ、オカリナで「千と千尋の神隠し」の曲を吹いていた。どうしてと聞いたら、この森と沼の雰囲気が「千と千尋の世界に見えてきたから」と語ったのが印象的だった。

（NPO法人白神自然学校一ツ森校校長　永井雄人）

マタギが熊を撃った時に熊肉を一時保存したり、狩猟のために使用したマタギ小屋

オカリナを吹く女子学生

◇訂正　6月24日付の「遊ぶ学ぶ白神」で二代信牧公とあるのは大浦家三代政信公でした。おわびして訂正します。